

訳者ノート

たった40年の生涯であったにもかかわらず、地球を駆けぬけた作家であったJ・ロンドン（1876-1916）がハワイにも逗留——それも何度か——したとしても、何ら不思議はない。最晩年（1915～16年）には、健康を害していたこともあって、保養・静養がハワイ訪問の主たる目的であった。

だが、ここに訳出した2篇の短篇は、最晩年訪問時のものではない。『スナーク』号という自前で造らせた帆船で世界一周の旅を試みた1907年までさかのぼる。ロンドン31歳、まだ壮健だった頃の同年4月にオークランドを出航し、28日ばかりでようやく最初の寄港地ハワイ（ホノルル）に立ち寄った。その後の5ヵ月余りの同地滞留中に1週間をハンセン病患者収容所のあったモロカイ島へと赴いた。ここではその折の経緯^{いきさつ}についてののみ、故ラス・キングマンの伝記（*A Pictorial Life of Jack London* (New York : Crown Publishers, 1979), pp. 186-7）から引いておくにとどめる。

公衆衛生局長リューシャス・E・ピンカムは、モロカイ（オアフ島の東隣の島）のハンセン病患者収容所についての偏見に関心を抱いていた。ハンセン病に関して不合理な不安がハワイ諸島に広く行きわたっていたが、それは単に人々がこの病気を理解していなかったからにすぎない。感染経路が誰にもわからないという点で、ハンセン病は不可解であった。1人の「病気でない」女性などは、5人のハンセン病の夫と結婚し彼らとの子供を儲けていながら、その犠牲になることは決してなかった。ハンセン病接触についての無分別な不安を静めるようにとの告示が出されたものの、信じる者などほとんどいなかった。新聞は、事態をいっそう悪化させる人騒がせな記事を書くばかりだった。たぶん人々は、ジャック・ロンドンの話になら耳を傾けるだろう！ピンカムはジャックの古くからのファンの1人であり、ジャックがいつも見たままのことを語るということを知っていた。そこで、モロカイに渡って、ハンセン病患者たちと1週間暮らし、その体験について書いてみてはどうか、と打診した。ジャック以上に行きたがったのは、チャーミアンただ1人であった。7月1日に彼らは『ノウエイユー』号に乗りこみ、翌日モロカイ島のカーラーウパーに着いた。

自給の村は、公衆衛生局下にはあっても、ハンセン病患者によって管理される1つの小さな町を占有していた。働きたい者は働き、働きたくない者や働けない者は世話を受けた。人々は、幸福で満足していた。時折、収容者のハンセン病検査で陰性に出て、家に帰されることがあっても、そういうことはまれであった。

ジャックとチャーミアンは、自由につきあった。着いたその日に、2人は射撃場へ行き、そこでまだハンセン病患者の手のぬくもりが残っている銃を使った。7月4日（独立記念日）には、モロカイで恒例の1日をあげての祝いがあった。午前6時に、「身の毛のよだつ連中」（ハンセン病患者たち）たちが派手な色の身なりをして出てきて、馬やらばやろば（彼ら自身の所有物）にまたがり、村落じゅうを跳ねまわった。2つのプラスバンドが、パレードのために音楽を提供した。競走、馬術競技、それからどんなに陽気な騒ぎを思いつこうと、そういうことをやる1日なのだった。ジャックは、コダックのカメラを持っていたる所へ顔を出した。村で手に入るかぎりのハンセン病関係の本を読み、何時間も医師たちと語りあった。それから、「モロカイのハンセン病患者たち」を書き、『ウーマンズ・ホーム・コンパニオン』誌に郵送した。

〔下線は筆者。訳は、拙訳書『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』（本の友社、1989）、pp. 333-4による〕

この時以来100年ほども経ているというのに、わが国にあっても今なおさまざまな形で尾を引きつづけているハンセン病をめぐる問題に、真正面から取り組んだロンドンのいくつかの仕事のうちのこれら2篇の持つ歴史的・文学的意義は、決して小さくはない。

近いうちに、他の文章をも含めこれら2篇の作品を中心に論究してみたいと考えている。